

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	25
紅玉集	27
10月号月評	28
恵贈句集拝見 (38)	30
恵贈句集拝見 (39)	32
恵贈俳誌拝見 (10)	34
特別作品「コモ湖・ドロミテ・チロルの旅2」...	36
他誌転載	38
俳誌交歓	39
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
エッセイ 越前の国	45
イタリア俳句・紀行文 (2)	46
妣の国父の蒼天 (31)	48
志摩一泊吟行記 (2)	50
エッセイ ソバと俳句と	52

今月の一句

寢惜しみてチロル二夜の星月夜

桂樟蹊子

(昭和四十八年作)

「チロルの町インスブルックで、聞いたヨーデルは素晴らしかった。その夜臘脂のカーテンの間にみる群嶺の星空は、殊の外美しく思われた」(昭和五十三年)と自註にある。その後、同じコースでチロルに旅をしたが、カーテンの色まで覚えていないし、句帳にも書き込んでいない。当時の印象が再現出来る師の記憶力、またそれを書き込まれた句帳の几帳面さなど、学ぶところの多い一句である。

隆子

志摩の旅 (二)

塩路隆子

さし潮の海を刻々夏暁の日
白南風の運ぶ潮の香岬寺
潮引きし礁を四散舟虫群
炎帝へ総身曝す潮仏
石仏にすがるふじ壺炎天下
詣でたる海女の涼しき束ね髪
国使めく揚羽高々国分寺
炎昼の磯桶乾く火場ほとり
梅雨時の潮錆びすすむ磯車
灼くる舟に一条海女のいのち綱

(海女資料館)

十月号光耀抄

塩路 隆子選

日焼子の広き肩幅美ら海に
見とれけり鱧の骨切る匠技
爪を切る音聞いてゐる夏毛猫
二度三度遠き会釈の夏帽子
今まさに生れたる蝉の薄みどり
夏夕べ深き眠りの古墳群
万緑や炭鋤町の滑車錆び
竜神の棲むてふ淵の肝試し
断捨離の胸へ一喝日雷
幾つがひ都離れず通し鴨
教会の重きドア押すサングラス
しなやかに初秋奏でる異邦人
浦上の八月の空眩しかり
鳴神の韋駄天走り関ヶ原
形あるものみな溶けるかに炎天下
鳴かぬ蝉飛ぶ夕侘しひとりの餉
煙突は産業遺産夕焼けて

竹内 悦子
田中 浅子
岡 佳代子
伊藤 憲子
桂 敦子
坂根 宏子
片岡久美子
松岡 和子
伊東 和子
北尾 章郎
阪本 哲弘
増田 一代
山口キミコ
藤見佳楠子
宮田 香
大松 一枝
小澤 菜美

地下出でて蟬の合唱瘦身に
 塔窓に顔見せる使徒夏日さす
 曝書てふ慣ひ廃れず電子本
 夏帽に黒きマニキュア顔見せず
 故郷は寂しき器墓参り
 白き石拾ひ晩夏の梓川
 村道のくねり変らず星月夜
 磨ガラス越しの風情や牽牛花
 ワインてふ誘眠剤や熱帯夜
 公園を包囲してをり蟬時雨
 ならまちに陰陽町や夜の秋
 熱帯夜羊の乱がひとしきり
 氷菓やはり昔ながらのミルク味
 夫の忌やドアにはりつく蟬ひとつ
 初盆や僧侶の説ける千の風
 手花火や昼のぬくみの残る縁
 漆黒の湖上遙かに揚花火
 終戦忌知覧を発ちし兵若き
 前に立つ夫の体温扇風機
 絞り染めの絵日傘まぶし工芸館

田下 宮子
 長濱 順子
 中本 吉信
 坂上 香菜
 塩路 五郎
 鈴木 照子
 中川 すみ子
 山崎 里美
 前川 ユキ子
 和田 郁子
 笠井 清佑
 森下 康子
 川崎 利子
 辻 知代子
 高谷 栄一
 杉本 綾
 三川 美代子
 能勢 栄子
 佐用 圭子
 福本 すみ子

短夜の早曉に鳴る猿おどし
 小さき鎌構へて威嚇子蝘蝓
 夕化粧てふは縁なし月見草
 落語家と乗りて天神祭船
 夏萩のそよぎて風のひとり言
 花氷へ手かざす人や銚の町
 苦瓜に没り日の責め苦まぬがれて
 鳶うたふ浦青苔の潮仏
 はひはひが前に進まず汗光る
 生まれ来る嬰の名も書きて星まつり
 読みかけのニーチェ片手に三尺寝
 宣伝の団扇派手目や繁華街
 白鷺の嘴に広がる水輪かな
 朝ぼらけ浄土世界の蓮の花
 巻紙の文筆確か生身魂
 かつと目を開き竹伐る鞍馬僧
 百米届く号砲秋の空
 穂孕みの稲田を襲ふ豪雨かな
 息荒し毛の衣脱ぎたき夏の犬
 二番煎じの如き父の日なりしかな

谷口 俊郎
 大島みよし
 中村ふく子
 伊藤 純子
 和田森早苗
 西垣 順子
 宮崎左智子
 田中 芳夫
 土井くみこ
 栗倉 昌子
 石川かおり
 飯田美千子
 五十嵐 勉
 池田加寿子
 井口 淳子
 伊藤 和子
 宇治 重郎
 大越 義雄
 大堀 賢二
 落合 晃

ケーブルを降りれば涼し別世界
 水打ちて快眠願ふ夕べかな
 識らぬ子も識る子をりぬ原爆忌
 高原に波立つ白や蕎麦の花
 原爆忌平和利用に不安かな
 精一杯のつかまり立ちや玉の汗
 歯ざはりの良き新生姜箸休め
 暁け初めて蝉鳴き始め街動く
 水なすの器量のよさや賀茂育ち
 青鯖を負ひたるむかし若狭越え
 万灯の明りに浮かぶきつね面
 鮨を食ふ鱧の骨切り眺めつつ
 一献に豆腐一皿と茄子煮かな
 けふも勝つ柏レイソル良夜かな
 竹落葉はらり舞ひたり後静か
 エコの夏ショートパンツに杉の下駄
 白猫の毛なみ軽やか夏仕様
 形代や無意識に吐く罪いくつ
 たっぷりと玻璃の小鉢のとろろ汁

山崎 真義
 山本 節子
 山本 孝夫
 山本 丈夫
 横田 矩子
 松田 和子
 松田 洋子
 村田 望
 秦 和子
 藤本 秀機
 中井登喜子
 難波 篤直
 新実 貞子
 西田 史郎
 竹内喜代子
 辻 香秀
 寺田 光香
 小西 和子
 小林 久子

琥珀集

鱧の味

田中 浅子

ロゼ色のゼリーふるふる匙の中
返信の切手の星座涼しかり
浴衣着て小股歩きの少女かな
風鈴の音に夕闇を纏ひけり
見とれけり鱧の骨切る匠技
鷺草の飛び立つさまやたそがれて
憧れの欧州遠しパリー祭

夏毛猫

岡 佳代子

日焼子の広き肩幅^{ちゅう}美ら海に
パイナップル上手に切りて島生活
夕立あと湖いささかの風生るる
熱中症なるやもしれぬこのだるさ
天下取る貌してをりぬいぼむしり
リハビリによき温泉^ゆといはれ岩魚飯
夏の夜のB級グルメコンテスト

蝉の羽化照らし歩道のパトロール
爪を切る音聞いてゐる夏毛猫
湖近き駅に秋風吹いてをり
晩年の余白自在や心太
種とばし合うて兄弟西瓜食む
昼見れば只の水路や蛸狩
老いふたり寄り添うて見る遠花火

夏帽子

伊藤 憲子

真桑瓜

坂根 宏子

八月や眼にくつきりときのご雲

熱帯夜夢か現か猫の声

二度三度遠き会釈の夏帽子

見えねども鳴き声黄色夏燕

雲の峰富士を輪切りの送電線

蝉鳴くや朝の二度寝の子守歌

短夜の夢のとぎれを惜しみけり

蝉しぐれ

桂

敦子

晩夏光

片岡久美子

泰山木の大輪真白香しく

温室は珍種の宝庫風炎ゆる

みちのくに思ひ馳せをり蝉しぐれ

今まさに生れたる蝉の薄みどり

町衆の心意気見せ銚巡行

世界一のものでしこジャパン夏快拳

怪談に涼しさ貰ふ節電下

伽倻琴とギターのコロボ夏マダン (広場)

縞りすの走る緑蔭石窟庵 (慶州)

風涼し色鮮やかな仏国寺

夏夕べ深き眠りの古墳群

瓦葺と藁葺村の夏茜 (安東)

仮面劇を守り継ぐ村鳳仙花

山積みの真桑瓜売る屋台かな

子飛蝗へ残して摘めるバジルかな

ピザ風に朱夏のバジルの香を刻む

映画ポスターびつしりの駅晩夏光 (夕張市)

万緑や炭鉱町の滑車錆び

本殿の氷柱撫でて邪気祓い (城南宮)

廃屋の塀より高し夏鮎

バタフライ海豚の気持知りたくて

肝試し

松岡 和子

竜神の棲むてふ淵の肝試し
朝顔の群青にあるDNA
頂きで虹に乗り継ぐロープウエー
四方より放つ蟬声写経堂
ひぐらしにいよよ古刹の靈気かな
振り出しに戻る銀婚夏の月
涼風の吹きて賑はふ峡の野良

日雷

伊東 和子

断捨離の胸へ一喝日雷
炎帝へ蝙蝠傘で抗しけり
足捌き合はず故郷の踊り唄
空蟬は梢のこゑの証拠品
商ひの暇な日果つる夕焼かな
花火師の闇へ仕掛ける二尺玉
鴨足草咲く里坊の水美しき

通し鴨

北尾 章郎

奥深き路地の旅籠や水を打ち
水打って招くのれんに魚ごころ
涼しさは一級なるよ鴨河原
幾つがひ都離れず通し鴨
余るほどに鴨の川風夏料理
節電の門前町や青葉木菟
裸子を超ミニの母叱りぬし

冷し酒

阪本 哲弘

祭太鼓打つ少年の氣魄かな
婚礼の段取り決まる貴船川床
角燈に観音の瞳の涼しかり
冷し酒記憶に齟齬の生じたる
ヨット恋ふ帆布の袋肩に掛け
鍵失せて泣く鍵っ子や西日なか
教会の重きドア押すサングラス

天の川

増田 一代

鳴神

藤見佳楠子

宴始まる仕掛花火に大喚声

時々はアニメの花火楽しかる

しなやかに初秋奏でる異邦人

ほろにがきコーヒーの味花芙蓉

湖風にジュピターを聞く秋涼し

観光船ゆつくり帰港夏の霧

ヴィオロンの音色の余韻天の川

八月の空

山口キミコ

炎天下

宮田

香

浦上の八月の空眩しかり

節電に我慢余儀なし終戦忌

日盛りにピーポピーポと救急車

折れ線の右肩上がり日射病

廃ガラスを風鈴とせしりサイクル

夏空にクレーン高々神戸港

梅雨明けの神戸ドックに異国船

湖風に秋の気配や水城址（膳所城址）

鳴神の韋駄天走り関ヶ原

沈む陽に燃ゆる古戦址花芒

鯖街道ひと足早き秋の草

鳴の海に秋陽漂ふ湖中句碑

茶柱の立つは吉兆今朝の秋

雑音の中の玉音終戦忌

夕焼に染まる白髭社御神体

形あるものみな溶けるかに炎天下

鉾祭見送り竜の睨みかな

手料理に効かせるハーブ暑気払ひ

ワイン酌む昼餉の優雅大暑の日

酒蔵にひそと風呼ぶ凌霄花

港絵の団扇風来るベニスかな

目高

大松 一枝

アロハシャツ

田下 宮子

しばらくは眼を遊ばせてカサブランカ

竹簾抜けたる風のやはらかき

白髪を自在に乱す青嵐

脳CT晴れて眩しき白日傘

節電に暗き水槽目高飼ふ

鳴かぬ蝉飛ぶ夕侘びしひとりの餉

庭に飼ふ小池の緋鯉きんつば屋

産業遺産

小澤 菜美

涼しげ

長濱 順子

煙突は産業遺産夕焼けて（近江八幡赤煉瓦窯）

赤煉瓦の茶房レトロや秋桜

原発不安横切る湖国や水の秋

緩るゆるの体操覗くジギタリス

小鳥観る双眼鏡の掌に重き

榎植^な生る下急ぎけり児を庇ひ

秋燕の高きを去ぬや見失ひ

アロハシャツ着て職員のクールビス

羅の江戸紫を身にまどふ

地下出でて蝉の合唱瘦身に

玫瑰や人馴れのして北狐

新涼やホテルの朝の奈良茶粥

朝涼や古都のホテルの車寄せ

UFOの出たてふ空の野分雲

ドナウ川のS字のカーブ緑なし（ハンガリー）

塔窓に顔見せる使徒夏日さす（チエコ三句）

涼しげにマリオネットの目の並ぶ

菩提樹の花の窓際国歌聞き

行列のウィーンのカフェや栃の花（オーストリア三句）

ホイリゲに奏でるギター夏の宴

宮殿の壁はイエロー薔薇の風

草千里

中本 吉信

衣被

塩路 五郎

一望の千里が原や青嵐

阿蘇山の裾広漠の青野かな

と見かう見望む青嶺の草千里

真清水の音や秘境の露天風呂

オナーの極楽の城蟻地獄

曝書てふ慣ひ廃れず電子本

跳ぶ度に三つ指の礼青蛙

今井町の古き醬油屋いわし雲

風鈴の乱れひと雨呼ぶ気配

故郷は寂しき器墓参り

老境に入り角のなき冷奴

TPO問はず物言ふ残暑かな

居酒屋の割箸不用衣被

蹲の水面に映る鱗雲

玉の汗

坂上 香菜

上高地

鈴木 照子

洗濯を仕掛けて散歩朝ぐもり

夏帽に黒きマニキュア顔見せず

散歩とて徘徊まがひ溽暑かな

片蔭に青待つハーレーダビットソン

烏瓜あちこち咲けり夕の月

夏空にPL塔の奇形かな

真剣な女鬼師や玉の汗（鬼瓦を造る人）

人慣れや大正池の夏の鴨

溶岩沈む池の涼風木椅子かな

羊歯若葉ウエストーン碑に山ガール

高原宿の大盛りカレー汗拭ふ

氷河跡残る青嶺や河童橋

白き石拾ひ晩夏の梓川

帽深く被り直して登山口

虫 干

中川すみ子

虫干の箆笥ひと棹妣を恋ふ
砂日傘の中にて読書波の音
白雲の動かぬ空や秋立てる
村道のくねり変らず星月夜
蝮裂く人はルージユを赤く引き
ままごとの客として訪ふ川蜻蛉
学校の塀に生きいき灸花

牽牛花

山崎 里美

水遊び光るしぶきに笑顔の子
二人住に薬味あふるる冷奴
素麺を囲みたる箸行き交へる
蝉しぐれに混じりて聞きぬ母の声
松虫の叫ぶがごとし真夜目覚め
磨ガラス越しの風情や牽牛花
奇跡とは受け入れること虹かかる

秋 蛩

前川ユキ子

祖母の無事問ふ児の元氣星月夜
桐一葉ゆるやかに風とどきけり
暁雲を背に秋立てる比叡山
ワインてふ誘眠剤や熱帯夜
大文字の三画点り手を合はず
母の遺影いつも笑顔よ盆の月
秋蛩ほのかに軌跡のこし消え

秋 涼 し

和田 郁子

大空に華やぐ羽状合歡の花
あさがほの赤の一群扉へ誘ふ
公園を包圍してをり蝉時雨
はたたがみ平和宣言うながせり
煌々とねぶたを飾るホテルかな
北山の白煙けぶる大文字
をさな追ふ祖父のまなざし秋涼し

瑠璃集

羊の乱

森下 康子

炎天にハチ公バスが灼けて着く
浴衣の児いつもと違ふ顔見せて
血圧も気温もうなぎ昇りかな
頑さ遺せる亡父の甚平かな
熱帯夜羊の乱がひとしきり

瓢

笠井 清佑

受付嬢

吉田 希望

炎昼や轟橋といふ橋渡る
ならまちに陰陽町や夜の秋
夏休み校舎に響くペットの音
糸蜻蛉空き教室に迷ひ込み
形よき瓢選べり二つ三つ

窓際に虫の寄り来るひとり住み
コップよりストロー短かソーダ水
紫蘇を吊る忍者の道具さながらに
冷奴隣人は戸を閉めてをり
昨日より日に焼けてをり受付嬢

八月

常田 創

蝉時雨

川崎 利子

少年の短き夏の使ひ道
背筋の汗すべりゆくデモの群
不思議なる絵を見て秋の初めかな
命また少し削りて星月夜
仕事して仕事増えけり螢草

若人の抱負眩しや晩夏光
リーダーの資質とは何玉の汗
夕風をまとふ白蓮すくと立
しんどいとは言はぬ性なり蝉時雨
氷菓やはり昔ながらのミルク味

十月号月評

塩路 隆子

この月評を書いているのは残暑厳しい八月十六日、お盆の帰省ラッシュの報道さ中である。夏休みを戴きながら何だかあわただしく過ぎたというのが実感である。あと半月を有意義に過ごしたいと思っている。句会がお休みであるのにも関わらず、皆様の良い作品に胸を躍らせながら月評をさせていただく。

日焼子の広き肩幅美ら海に

竹内 悦子

沖繩での作品である。「美ら海」を「ちゅら海」と読むのはご存知と思うが沖繩の言葉のまま句にされて臨場感を強くしている。真っ青なサンゴ礁の美しい海に泳ぐ現地の子供たちが目に飛び込む。その光景を眺める作者には、頑強な、逞しい子供たちへの羨望の目、期待感が膨らむ。「広き肩幅」の措辞がそれを物語っている。開放的な沖繩の海に拾った一コマの映像をうまく句にされた。

見とれけり鱧の骨切る匠技

田中 浅子

昔から「鱧がなければ祇園祭は始まりまへん」また祇園祭を「鱧祭」と言う位に深い繋がりをもっている。骨切りの皮一枚を残す技は、調理人の腕を試すものだという位にきびしいものがあるようである。作者はその鱧料理を食べに行かれた時のこと、骨切りを目のあたりに見て「匠技」と捉えられた。それ位にリズムカルな包丁捌きであったと言う。「見とれけり」にしばし呆然と見とれる作者の顔が浮かぶ。格調を感じる句である。

爪を切る音聞いてゐる夏毛猫

岡 佳代子

静かなひと刻を描いた作品である。風呂上り、いやそれよりも静かな午後のひと刻であろう。ぱちりぱちりと爪を切る作者、それを聞いているのは猫だけ、空しい空気の流れを感じるのには「爪を切る」と「夏毛猫」の措辞でうまく表現され良い作品に仕上がっている。爪を切る音が空しく響く午後のひと刻と断定出来る句である。

(以下略)